

境界を越える旅人の影

荒木 正純

学問も人の行うことであるので、学問外で人がおこなうことがやはり見られる。

生物の世界でもテリトリーが存在していて、決して無秩序に個が空間全体を自分のものとして主張するわけではない。しかし、その世界でも、他の個のテリトリーに入り込む個がいるものである。その動機はいろいろあろう。自分のテリトリーが、余り条件がよくない場合。自己保存本能のごときものが働いているのであろう。ただそれだけか。興味が動機であることはないのか。決してこの場合、領土拡大の野望が動機なのではない。おもしろそうなのである。自分のテリトリーに、なんで自分がいなくてはならないのかと問う。そのテリトリーの周辺を執拗に追求していたら、知らないうちに別の個のテリトリーに入っていたということもあるのではないか。

そうした個で、他の個に攻撃を受け、すごすごと自分のテリトリーに戻るものもいるであろう。しかし、その戻るテリトリーが、もはやなくなっていたとしたらどうか。戻れない。常に、自分の居場所であったテリトリーを放棄して、先に進むものもあるだろう。どこへいっても、攻撃を受ける。攻撃を受けることが、その個の生であるものもいよう。この個は、決して出かけたテリトリーの個を攻撃せず、そこを占有しようとしな。こうした生は、世界に存在しないのであろうか。もし、存在するとすれば、〈旅人〉あるいは〈流浪の存在〉として、暫時滞在を許可してもらうこと以外にないであろう。しかも、その許可は、滞在を許す主人に何らかの利益をもたらさなくては得られないであろう。この〈流浪の存在〉は、そのこつをこころえている。

赤祖父哲二の学問、このようにいうことすら許されないことかもしれない。つまり、学問というテリトリーを前提にしているからである。それは〈知の流浪〉ともいべき生であった、いやあるし、あるであろう。ひょっとしたら〈知〉ということすらいえないことなのかもしれない。〈情〉であるかもしれない。また、〈意〉であるかもしれない。おそらく赤祖父先生が退官なさるにあたり、わたしが過去のおつきあいで知りえたことを回顧するなら、そういういいかたしかできない。膨大な

著作（わたし流にいえば「テキスト」生産）とおつきあいして受けた印象（刻印された像）を、分析してみるとこうなる。

わたしは頂戴したご著書の読後感として、不遜にも「土俗的な情念的なところ」がいいと申し上げたことがあった。おそらく萩原朔太郎論に対しての反応であったと思う。こうしたテキストは、決して多くはない。〈流浪の存在〉として、なにか矛盾するようであるが、決してそれは矛盾ではない。その存在性として、どこかにそうした要素、あるいは憧れ、あるいはノスタルジアがあるのだと思う。あるいは、〈旅人〉が背負っている影なのかもしれない。

この旅人は、またさらに境界を越えようとしている。